

きゅうり

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
べと病	－	やや多	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高かった。(+) (2) 現地では、本病害に対する抵抗性品種の導入が進められている。 (－)
うどんこ病	－	やや少	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 7月の気温は平年並か高い予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
斑点細菌病	－	やや少	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並であった。(±) (2) 7月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、感染に不適な条件である。(－)
黒星病	－	少	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 7月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、感染に不適な条件である。(－)
褐斑病	－	やや多	(1) 前年秋期の発生圃場率は、平年より高かった。(+) (2) 7月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、感染に好適な条件である。(+)
炭疽病	－	やや多	(1) 前年秋期の発生圃場率は、平年より高かった。(+) (2) 7月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、感染に好適な条件である。(+)
ワタアブラムシ	－	並	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。(－) (2) 7月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。 (+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- 7月前半はべと病、黒星病及び斑点細菌病、後半は炭疽病、褐斑病及びうどんこ病の予防散布を徹底する。
なお、炭疽病、褐斑病のまん延を防ぐため、疑わしい病斑が見られたら摘葉を行い、速やかに薬剤散布を行う。
- 7月中旬以降は、茎葉が繁茂してくるため、薬剤の散布ムラが生じやすいので、株全体の葉の裏表にムラなくかかるようにアーチの両側から散布する。

【べと病】

- 下葉や古い葉に発生しやすいので、敷わら等を行い雨滴による病原菌の飛散を防ぐ。また、発病を確認してからでは被害が大きくなるので予防散布に努める。

【うどんこ病】

- 葉裏や茎、側枝でまん延するので注意して観察し、発生が見られたら早期に防除を行う。特に、うどんこ病耐病性ではない品種においては注意する。
- 耐病性品種でも、成り疲れ等で草勢が衰えると発病するので、効果のある薬剤で防除する。

【斑点細菌病】

(1) 降雨が続くと発生が助長されるので、発生初期に防除を徹底する。

【黒星病】

(1) 低温・多雨条件で発生が多く、生育初期に発生すると被害が大きいため、7月前半までの防除を重点的に行う。

(2) 発生後の散布では防除効果が現れにくいので予防散布に努める。

(3) 発病しやすい生長点や若い葉、幼果に薬液がかかるように丁寧に散布する。

【褐斑病、炭疽病】

(1) 両病害とも、発生を確認してからでは防除が困難なので、予防散布に努める。

(2) 初期の発病葉を摘葉後、両病害に効果の高いダコニール1000もしくはゲッター水和剤を散布する。

【モザイク病、ワタアブラムシ】

(1) モザイク症状が激しい株は、早期に抜き取る。

(2) ワタアブラムシの防除については、定植時に粒剤を施用していても効果が切れる頃なので、引き続き防除を行う。

3 防除上の留意事項

(1) 薬剤選択にあたっては、耐性菌や抵抗性害虫の出現を回避するために、同一系統の薬剤を連用せずに、異系統の薬剤をローテーションで使用する。